

## 論文

# キャリア教育からみた出前講義の効果と限界

——普通科高校のキャリア教育に高大連携活動をどのように位置づけるか

西郡 大\*

\*佐賀大学アドミッションセンター

## The effect and limitation of delivery lecture from the point of view of career education.

Dai Nishigori\*

\* Admissions Center, Saga University

It was the purpose of this study to examine the effect and limitation of delivery lecture which is one of educational articulation between high school and university from the point of view of career education. The participants were high school students who took delivery lecture(N=5,635). The results indicated that delivery lecture increased student's desire to learn. Fresh sense and amazing discovery of higher education particularly had a big influence on increasing desire to learn. To enhance student's satisfaction of taking delivery lecture, the following four factors is important. Those factors were "teacher's performance", "initiating the interest of content of a lecture", "fresh sense and amazing discovery of higher education", "understanding content of a lecture". For universities for the purpose of acquiring applicant, delivery lecture had limited effectiveness against acquiring applicant.

**Keywords** : Common Course, career education, delivery lecture, educational articulation between High School and University

**キーワード** : 普通科高校, キャリア教育, 出前講義, 高大連携活動

---

\* 〒840-8502 佐賀市本庄町1番地 佐賀大学アドミッションセンター

Correspondence concerning this article should be sent to: Dai Nishigori, Admissions Center Saga University, 1 Honjyo-machi, Saga-city, Saga, JAPAN, 840-8502. Email: nisigori@cc.saga-u.ac.jp

## 1. はじめに

### 1. 1. 背景

「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（中央教育審議会,1999）によりキャリア教育が推進されて以降、「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書」（文部科学省,2006）において、高等学校普通科（以下、「普通科高校」と略記）におけるキャリア教育推進のための方策として6つの枠組みで15の提言がなされた。同提言の1つのである「学校間・学校種間の更なる連携・協力の推進」では、「高校から大学等への授業参加, 大学から高校への出前講座といった高大連携の取り組みが広がってきたものの、『出口指導』や『授業紹介』にとどまっているなど, キャリア教育の視点から取り組まれてきたとは言い難い」と現キャリア教育の問題点が指摘されている。

一方, 18歳人口の減少が進む中, 大学増加に伴う入学定員の拡大は, 入学総定員数と志願者総数が一致する「大学全入時代」をもたらし, 「無目的に『入れる』大学, 学部・学科を選択して『入った』学生が, 学業や生活に適応できなかったり, 厳しい就職等の状況を克服できなかったりしている」（文部科学省,2006）といった状況を生み出している。こうした状況は, 「受験競争」（中井,2001）の弊害等が声高に叫ばれた時代における「多くの生徒において進路決定のレディネスができていないにもかかわらず, 受験という外部からの押し付けられる課題を前に未熟な決定をしなければならない状況」（下山,1983）とは性格が少し異なるといえる。

大学進学希望者の進路に関する研究は, 大学進学を想定した進路指導や生徒自身の進路選択という文脈の中で, 各分野において様々な研究が蓄積されてきた。例えば, 選抜・配分のメカニズムからみた高校生の進路意識の変容に関する検討（荒川,2001）, 出身階層や価値志向の効果からみた高校生の学習意欲と進路希望の形成（荒牧,2002）といった社会学的なアプローチによるもの。また, 高校生の立場からみた進学動機や態度および意思決定のメカニズムを検討した心理学的なアプローチ（八谷,1982；三川,1985；古市,1993；楠見ら,2008など）。さらには, 進路指導を実際に行う関係者の指導方針や態度について検討したもの（前田ら,1991；松村ら,1994）などが挙げられる。しかしながら, 従来の研究には, 高大連携活動のように大学との交流の中から生じた高校生の意識の変容や進路指導の実情および変化について検討したものは管見の限り見当たらない。

大学全入時代の高大接続は, 学生を「選抜」する時代から, 大学と進学希望

者の「相互選択」する時代に移っている（中央教育審議会,2008）。したがって、多くの生徒が大学進学を希望する普通科高校のキャリア教育では、大学と高校の連携・協力がもたらす効果が期待されていると考えられる。

## 1. 2. 普通科高校における主な高大連携活動

「2012年高校の進路指導・キャリア教育に関する調査報告書」（リクルートマーケティングパートナーズ,2013）のデータをもとに近年の普通科高校における高大連携活動に関する実態を整理したものを示す（表1・表2・表3）。高校全体でみると「大学教授による出張講義」において増加傾向がみられ普通科高校での実施割合が高い。特に、大学・短大進学率が上がるほど高くなる。なお、同報告書によると、大学・短大の進学率の低い高校（40%未満）では、「ハローワークとの連携」「就業体験（インターンシップ）」「職場見学」などが主な取り組みとされる。こうした実態を踏まえ、本研究では、普通科高校のキャリア教育の一環として実施されている高大連携活動の代表的な取り組みである「出前講義」に注目する。なお、以降で示す「普通科高校」とは、大学進学希望者が一定数以上存在する普通科の高校を想定する。

表1. 近年の高大連携活動の取り組み状況

高大連携活動の取組み状況	2008年	2010年	2012年
[A] 大学教授による出張講義	53.2%	58.4%	61.9%
[B] 大学での講義受講	31.9%	30.7%	33.1%

表2. 高校タイプ別の取組み状況

高校タイプ	[A]	[B]
普通科高校	66.7%	34.2%
総合学科	59.0%	42.2%
専門学校	37.2%	23.4%

表3. 大学・短大進学率別の取組み状況

進学率	[A]	[B]
70%以上	78.1%	40.4%
40-70%	67.5%	33.8%
40%未満	36.6%	22.9%

## 1. 3. 本研究の目的

出前講義を実施する高等学校は、どのような効果を期待しているのだろうか。筆者が所属するS大学では、出前講義を実施した高校の教員を対象に質問紙調査を行っており、「出前講義のような高大連携活動がもたらす効果について、どのようなものがあるとお考えですか」と自由記述の回答を求めている。その代表的な意見には、「大学という未知の事柄に触れることによって、生徒の将

来の進路選択の幅が広がると思う」「生徒は学部学科名からのイメージや思い込みで進路先を決めてしまうことも多いので、インターネット等の情報のみでなく、大学の先生方からの生の講義を受けることで、より現実的に捉えられるようになる」「オープンキャンパスは、意識の高い生徒が参加するが、出前講義は中程度またはそれ以下の生徒にも刺激を与える絶好の機会になると思う」「より高いレベルの学問、講義に触れることにより、生徒自身の学習意欲の向上につながるのではないかと思う」といったものがあり、大学だからこそ提供できる新鮮な刺激を通して、生徒たちの「学習意欲の喚起」や「進学意欲の喚起」を期待する意見が多くみられる。そこで本研究では、実際の出前講義を受講した生徒を対象に質問紙調査を実施し、以下の3点について検討した。

1点目は、高校教員が期待する「学習意欲の喚起」や「進学意欲の喚起」は、出前講義によって生じているのかを検証することで、高校側の狙いが出前講義によって実現できているかを確認する。特に、どのような要因によって学習意欲等の喚起がなされるのか、そのメカニズムを把握することは有効な出前講義を実施するために重要なことである。そこで、出前講義を実施することによって生じると考えられる要因として、次の4つを想定した。1つ目は、高校では味わえない大学だからできる「新鮮な発見」である。新鮮な発見により、大学進学に向けて勉強しようという意欲の喚起に繋がるのが考えられ、高校教員も生徒の新鮮な発見に大きな期待を寄せていると思われる。2つ目は、派遣講師の力量である。大学から派遣される教員は様々である。高校生とのコミュニケーションや雰囲気作りによって講義を盛り上げる教員がいる一方で、難しい研究内容を延々と紹介し、重苦しい雰囲気ですべてを終える教員もいる。このような派遣教員個人の力量は、受講する生徒の印象を左右する大きな要因となり得るだろう。3つ目は、講義内容に対する生徒の理解である。講義内容は、大学で学ぶ学問分野や研究内容など、高校で学ぶものとは異なり難しい内容も多いと考えられる。派遣教員は、高校生にも理解できるように出来る限り分かりやすく解説していると思われるが、それでも内容的に難しいことは否定できない。したがって、講義内容をどの程度理解できたのかは重要な要因として考慮しなければならない。4つ目は、講義内容に対する興味・関心の喚起である。受講前は興味や関心が無くても受講を通して興味・関心を抱くことは、学習意欲を喚起する要因として十分に考えられる。以上4つの要因を学習意欲等を喚起する規定要因と想定し、その影響力を検討する。

2点目は、高校教員が期待する学習意欲等の喚起とは異なる観点で、生徒自身が感じる受講内容に対する満足度に注目する。どのような要因によって受講

者の満足感が高められるかを明らかにすることは、出前講義を担当する大学教員にとっても有益な視点である。したがって、1点目の研究目的で想定した4つの要因を用いて、出前講義に対する満足感を規定する要因について検討する。

3点目は、高大連携活動の一環として実施されることが多い出前講義であるが、出前講義を行う大学にとっては、出前講義の内容に興味や関心を持ってもらい、あわよくば自分の大学や学部を受験して欲しいという思惑もある。そこで、出前講義を実施することがどの程度の広報的な効果があるのかを検証する。なお、分析には、上記2つの研究目的と同じ4つの要因を用いる。

そして最後に、上記3点の分析を踏まえ、普通科高校のキャリア教育における高大連携活動の位置づけについて考察する。

## 2. 方法

筆者が所属するS大学では、平成12年度から高校と大学との連携を目的とした出前講義を実施しており、毎年、約200名の教員が派遣され、約5,000名の生徒が受講している。講義内容は、文学、教育学、芸術学、経済学、経営学、法学、医学、理学、工学、農学など多様な学問分野で構成されている。出前講義を希望する高校は、大学から提供される「講義メニュー」の中から希望する分野のコースを選択して依頼する。なお、実施当日までに、各高校の担当者と派遣教員との間で、講義内容について打ち合わせすることを義務付けており、両者の考え方のミスマッチを最小限に抑えるようにしている。

実施後には、受講した生徒と当該高校の教員数名に質問紙調査を実施している。本質問紙は、出前講義の効果検証を目的として実施してきたが、平成22年度と平成23年度のみ、本研究を行うために項目を変更して実施した。平成22年度は、予備調査として実施し、不適切な項目や修正が必要な項目を見直し、平成23年度において本調査を実施した。

質問項目は、性別、学年、大学・短大の進学希望有無、S大学に対する関心、講義内容に対する受講前の関心、そして受講後の感想である。受講後の感想は、「そう思わない」「あまりそう思わない」「どちらとも言えない」「少しそう思う」「そう思う」の5件法で尋ねた。従属変数として、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」「出前講義に対する満足度」「実施大学に対する親近感」の3変数（12項目）、独立変数として、「大学に対する新鮮な発見や驚き」「派遣教員個人の力量」「講義内容に対する理解度」「講義内容に対する興味・関心の喚起」の4変数（20項目）を想定した。これらの変数について、因子分析、重回帰分析、分散分析等の多変量解析を行った。

### 3. 結果

#### 回答者の属性と事前意識

受講生徒の質問紙の回収数は 6,687 件であり、生徒の受講講義が明確である 5,635 件を分析対象とした。回答者の属性を表 4 に示す(無回答は除く)。「セミナー受講前から大学や短大へ進学しようと考えていましたか(以下、「大学・短大への進学希望有無」と略記)」という質問に対する回答は、「はい」(4,950 件 [87.8%]), 「いいえ」(288 件 [5.1%]), 「わからない」(375 件 [6.7%]) であり、受講者の多くが大学・短大への進学を希望している。また、「今日のセミナー内容は、もともと興味ある分野でしたか」(以下、「受講前の講義内容に対する関心度合い」と略記)という質問に対しては、「はい」(3,617 件 [64.2%]), 「いいえ」(577 件 [10.2%]), 「わからない」(1,352 件 [24.0%]) であり、受講前の生徒たちの講義に対する事前意識は多様なものであった。

表 4. 回答者の属性

性別	学年		
	1 年生 (%)	2 年生 (%)	3 年生 (%)
男子	551(42.5)	1,605(49.0)	526(50.3)
女子	744(57.5)	1,671(51.0)	519(49.7)

%は、各学年の男女比

#### 因子分析による結果

因子分析(プロマックス回転, 最尤法)の結果, 従属変数として想定する「大学進学に向けた学習意欲の喚起」は 4 項目, 「出前講義に対する満足度」は 5 項目, 「実施大学に対する親近感」は 3 項目で構成された。各変数とも  $\alpha$  係数は 0.8 以上と十分な値が得られた(表 5)。

一方, 独立変数として想定する項目に対する因子分析(プロマックス回転, 最尤法)の結果, 「もっと難しくて専門的な話の方が良い」「高校の先生から聞くような話とあまり変わらなかった」「自分の将来的な進路を考える上で役に立った」という 3 項目が複数の因子に対して負荷量が高かったため, 同項目を外して再度因子分析を行った。その結果, 「大学に対する新鮮な発見や驚き」は 6 項目, 「派遣教員個人の力量」は 5 項目, 「講義内容に対する理解度」は 3 項目, 「講義内容に対する興味・関心の喚起」は 3 項目で構成された。各変数とも  $\alpha$  係数は, 0.75 以上と十分な値が得られた(表 6)。これらの因子構造は, 予備調査の結果とほぼ同じであった。

表 5. 従属変数として想定する変数の因子構造(プロマックス回転後:最尤法)

	I	II	III	共通性
<b>I. 大学進学に向けた学習意欲の喚起(<math>\alpha = .80</math>)</b>				
頑張って受験勉強をやると思う	.81	-.09	-.05	.53
大学についてもっと知りたいと思った	.76	-.04	.07	.59
大学で学ぶためには高校での勉強が大事なのだと思った	.72	-.10	-.02	.42
はやく大学で勉強してみたいと思った	.68	.06	.00	.51
<b>II. 出前講義に対する満足度(<math>\alpha = .83</math>)</b>				
全体的にセミナーの内容は満足できるものだった	-.08	.90	-.01	.73
このようなセミナーは、後輩にも勧めたい	-.03	.83	.03	.68
もう少し改善したほうが良いと思う (逆転項目)	-.13	.65	-.06	.30
大学の先生の話聞いてよかった	.36	.49	-.01	.58
また機会があれば、このようなセミナーに参加してみたい	.26	.46	.11	.53
<b>III. 実施大学に対する親近感(<math>\alpha = .84</math>)</b>				
S大学についてもっと知りたいと思った	-.02	-.07	1.01	.93
S大学で勉強したいと思うようになった	-.03	-.04	.89	.74
S大学を見直した	.06	.17	.48	.38
因子間相関		II	III	
II	.64	-		
III	.55	.50	-	

表 6. 因子分析から得られた因子パターン(プロマックス回転後:最尤法)

	IV	V	VI	VII	共通性
<b>IV. 大学に対する新鮮な発見や驚き(<math>\alpha = .83</math>)</b>					
大学でやっている研究や活動はすごいと思った	.86	-.03	-.09	-.07	.60
大学ならではの専門的な話が聞けた	.74	-.09	.02	-.06	.44
さすが大学の先生だと思った	.72	.16	-.10	-.02	.59
今まで知らなかったことについて知ることができた	.60	-.03	.07	.09	.46
大学での学びや研究をある程度イメージ出来るようになった	.51	-.03	.18	.01	.35
今まで味わったことのない新鮮な刺激だった	.47	.09	-.13	.23	.41
<b>V. 派遣教員個人の力量(<math>\alpha = .85</math>)</b>					
受講者の理解を深めるような工夫がこらされていた	.01	.79	.04	-.01	.67
講師と生徒のコミュニケーションが取れていた	-.09	.76	-.05	.03	.48
全体的にセミナーの雰囲気は良かった	.03	.67	.07	.04	.59
講師の先生から、熱意や意欲が伝わってきた	.23	.54	.03	-.07	.47
講師の先生は、高校生にも分かりやすく話してくれた	.02	.43	.38	.00	.56
<b>VI. 講義内容に対する理解度(<math>\alpha = .76</math>)</b>					
セミナーの内容は、理解できるものだった	.07	-.14	.93	.06	.83
まわりの生徒もセミナーの内容を理解しているように感じた	.09	.10	.72	-.07	.63
内容が難し過ぎて、高校生には理解できない (逆転項目)	-.26	.11	.51	.09	.32
<b>VII. 講義内容に対する興味・関心の喚起(<math>\alpha = .77</math>)</b>					
セミナーで聞いた内容についてもっと知りたいと思った	.02	.01	-.01	.86	.75
講師の先生の話は、自分の興味や関心をひくものだった	.07	.02	.07	.78	.78
もう少し違う分野だったら興味がわいたかもしれない (逆転項目)	-.05	-.02	.06	.49	.24
因子間相関		V	VI	VII	
V	.64	-			
VI	.41	.67	-		
VII	.58	.64	.62	-	

### 各変数の基本統計量

各変数における1項目辺りの平均値、標準偏差および相関係数を表7に示す。まず、3つの従属変数では、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」の平均値が4.14 (SD=0.72) と高く、受講した生徒たちは、少なくとも受講直後においては大学進学に向けた学習の意欲が喚起されていることが明らかになった。次に、「出前講義に対する満足度」の平均値は3.94 (SD=0.72) と「大学進学に向けた学習意欲の喚起」ほどは高くないが、一定の満足感が得られている。最後に、「実施大学に対する親近感」の平均値は3.38 (SD=0.89) と、他の2変数と比べると少し低かった。

一方、独立変数においては、「大学に対する新鮮な発見や驚き」の平均値が4.03 (SD=0.65) と最も高く、「派遣教員個人の力量」と「講義内容に対する理解度」の平均値は3.89 (SD=0.72), 3.88 (SD=0.80) と同程度であった。「講義内容に対する興味・関心の喚起」の平均値は、3.64 (SD=0.84) と、他の3変数に比べると少し低かった。

表7. 各変数の1項目あたりの平均値、標準偏差および相関係数

変数名	N	Mean	SD	1	2	3	4	5	6
1. 大学進学に向けた学習意欲の喚起	5614	4.14	0.72						
2. 出前講義に対する満足度	5604	3.94	0.72	.54**					
3. 実施大学に対する親近感	5612	3.38	0.89	.46**	.46**				
4. 大学に対する新鮮な発見や驚き	5559	4.03	0.65	.51**	.64**	.42**			
5. 派遣教員個人の力量	5579	3.89	0.72	.45**	.75**	.40**	.57**		
6. 講義内容に対する理解度	5623	3.88	0.80	.32**	.59**	.24**	.33**	.61**	
7. 講義内容に対する興味・関心の喚起	5624	3.64	0.84	.40**	.69**	.39**	.51**	.57**	.54**

### 重回帰分析による規定要因の分析

「大学進学に向けた学習意欲の喚起」「出前講義に対する満足度」「実施大学に対する親近感」を従属変数として重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

まず、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」では、「大学に対する新鮮な発見や驚き」( $\beta = .35$  \*\* $p < .001$ ) が最も高く、「派遣教員個人の力量」( $\beta = .17$  \*\* $p < .001$ ), 「講義内容に対する興味・関心の喚起」( $\beta = .10$  \*\* $p < .001$ ) と続く(表8)。性別では大きな違いはみられないが、学年において1年生は、「大学に対する新鮮な発見や驚き」( $\beta = .41$  \*\* $p < .001$ ) の影響力が強く、3年生は、「派遣教員個人の力量」( $\beta = .24$  \*\* $p < .001$ ) の影響力が強いことが確認された。また、1年生において、「講義内容に対する興味・関心の喚起」の影響力がみられなかったのも1つの特徴である。

「出前講義に対する満足度」では、「派遣教員個人の力量」( $\beta = .38$  \*\* $p < .001$ )



が最も高く、「講義内容に対する興味・関心の喚起」( $\beta = .30$   $**p < .001$ ), 「大学に対する新鮮な発見や驚き」( $\beta = .23$   $**p < .001$ ), 「講義内容に対する理解度」( $\beta = .12$   $**p < .001$ )と続く(表9)。自由度調整済み決定係数( $R^2$ )も.71と高く、4つの変数で大きな影響力を持っていることが示された。性別では大きな違いはみられないが、学年において3年生は、「派遣教員個人の力量」( $\beta = .41$   $**p < .001$ )の影響力が強く、「講義内容に対する興味・関心の喚起」( $\beta = .25$   $**p < .001$ )が他学年に比べると少し弱いことが確認された。

「実施大学に対する親近感」では、「大学に対する新鮮な発見や驚き」( $\beta = .23$   $**p < .001$ )「講義内容に対する興味・関心の喚起」( $\beta = .20$   $**p < .001$ )「派遣教員個人の力量」( $\beta = .19$   $**p < .001$ )の3変数が一定の影響力を持っている(表10)。性別では大きな違いはみられないが、上位の学年になるにつれ、「講義内容に対する興味・関心の喚起」の影響力が高まる傾向がみられる。また、2年生のみ、「派遣教員個人の力量」( $\beta = .20$   $**p < .001$ )の影響力が強くなっているのも1つの特徴である。

表8. 「大学進学に向けた学習意欲の喚起」の規定要因

属性	$R^2$	大学に対する新鮮な発見や驚き	派遣教員個人の力量	講義内容に対する理解度	講義内容に対する興味・関心の喚起
全体	.31	.35**	.17**	-	.10**
男子	.33	.37**	.20**	-	.10**
女子	.26	.31**	.17**	-	.13**
1年生	.34	.45**	.19**	-	-
2年生	.30	.33**	.17**	-	.12**
3年生	.32	.29**	.24**	-	.14**

表9. 「出前講義に対する満足度」の規定要因

属性	$R^2$	大学に対する新鮮な発見や驚き	派遣教員個人の力量	講義内容に対する理解度	講義内容に対する興味・関心の喚起
全体	.71	.23**	.38**	.12**	.30**
男子	.70	.24**	.39**	.11**	.29**
女子	.70	.22**	.37**	.12**	.32**
1年生	.68	.23**	.37**	.11**	.30**
2年生	.72	.22**	.37**	.12**	.31**
3年生	.72	.23**	.41**	.14**	.25**

表10. 「実施大学に対する親近感」の規定要因

属性	$R^2$	大学に対する新鮮な発見や驚き	派遣教員個人の力量	講義内容に対する理解度	講義内容に対する興味・関心の喚起
全体	.23	.23**	.19**	-	.20**
男子	.24	.22**	.21**	-	.19**
女子	.22	.24**	.17**	-	.21**
1年生	.24	.28**	.15**	-	.15**
2年生	.22	.21**	.20**	-	.20**
3年生	.28	.25**	.15**	-	.23**

受講者の事前意識別にみる各変数の特徴

「大学・短大への進学希望有無」と「受講前の講義内容に対する関心度合い」という受講者の事前意識の違いによって、各要因にどのような特徴がみられるかについて、各変数の平均点の分散分析を行った。

まず、「大学・短大への進学希望有無」では、すべての変数において大学・短大への進学希望者（「はい」の回答者）の平均点がそれ以外の者よりも高かった（表 11）。特に、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」と「実施大学に対する親近感」においては、進学希望者と進学を希望しない者（「いいえ」の回答者）の平均点の差が大きいのが特徴である。

次に、「受講前の講義内容に対する関心度合い」では、すべての変数において、もともと興味ある者（「はい」の回答者）の平均点がそれ以外の者よりも高かった（表 12）。特に、「講義内容に対する興味・関心の喚起」「大学進学に向けた学習意欲の喚起」「実施大学に対する親近感」において、もともと興味ある者ともともと興味ない者（「いいえ」の回答者）の平均点の差が大きく開いているのが特徴である。

以上のことから、受講前における生徒の意識の違いによって出前講義の効果にも違いが生じることが明らかになった。ただし、事前意識の違いによる平均点の差はあるものの、各変数の平均点は、全て3点以上を示しており、出前講義の経験が否定的に受け取られているわけではない。

表 11. 大学・短大進学希望の有無による各変数の平均値の比較

変数	大学短大進学希望 (Q.受講前から大学や短大へ進学しようと考えていたか)									多重比較 (Tukey 法)
	はい (Y)			いいえ (N)			わからない (DN)			
	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	
大学に対する新鮮な発見や驚き	4884	4.05	0.64	284	3.88	0.66	370	3.89	0.68	Y > N=DN
講師とのコミュニケーション	4904	3.91	0.72	284	3.75	0.74	369	3.72	0.71	Y > N=DN
講義内容に対する理解度	4941	3.90	0.80	286	3.82	0.86	374	3.69	0.75	Y > DN
講義内容に対する興味・関心の喚起	4941	3.67	0.84	287	3.39	0.84	374	3.41	0.78	Y > N=DN
大学進学に向けた学習意欲の喚起	4936	4.22	0.67	285	3.45	0.94	371	3.70	0.73	Y > DN > N
出前講義に対する満足度	4928	3.97	0.71	286	3.71	0.74	368	3.70	0.69	Y > N=DN
実施大学に対する親近感	4932	3.41	0.89	286	2.97	0.97	372	3.29	0.78	Y > DN > N

表 12. 受講前の講義内容に対する関心度合いによる各変数の平均値の比較

変数	講義内容への興味 (Q.講義内容は、もともと興味ある分野だったか)									多重比較 (Tukey 法)
	はい (Y)			いいえ (N)			どちらも無い (N/A)			
	N	Mean	SD	N	Mean	SD	N	Mean	SD	
大学に対する新鮮な発見や驚き	3568	4.12	0.62	565	3.81	0.74	1338	3.87	0.63	Y > N= N/A
講師とのコミュニケーション	3588	4.00	0.70	568	3.63	0.80	1337	3.72	0.69	Y > N= N/A
講義内容に対する理解度	3609	4.02	0.76	577	3.54	0.92	1348	3.66	0.79	Y > N= N/A
講義内容に対する興味・関心の喚起	3609	3.92	0.72	577	2.82	0.92	1350	3.24	0.70	Y > N/A > N
大学進学に向けた学習意欲の喚起	3600	4.26	0.66	575	3.87	0.86	1350	3.93	0.72	Y > N= N/A
出前講義に対する満足度	3604	4.10	0.67	573	3.52	0.81	1339	3.71	0.67	Y > N/A > N
実施大学に対する親近感	3605	3.52	0.86	576	2.89	1.00	1344	3.21	0.83	Y > N/A > N

## 4. 考察

### 出前講義により学習意欲は喚起されているのか

「大学進学に向けた学習意欲の喚起」の平均値はもっとも高く、少なくとも受講直後において彼らの学習意欲は喚起されていることが示された。その大きな要因として、「大学に対する新鮮な発見や驚き」が挙げられる。つまり、出前講義によって学習意欲を喚起することを目的とする場合、高校では得られない経験や体験をもたらす講義を大学側に要望することが重要なのである。特に、1年生を対象とする場合、その効果は高いといえる。

一方、「講義内容に対する理解度」は、あまり重要な要因ではなかった。出前講義を担当する大学教員は、高校生に合わせた内容の設定や話し方などを意識しながら、模擬講義や実験を行っていると考えられる。しかしながら、大学進学に向けた学習意欲を喚起するためには、講義内容の理解を高めるよりも、新鮮な発見と驚きを意識した内容で構成する方が効果的なのである。講義を担当する派遣教員には、生徒の学習意欲を喚起することよりも、自分が行う講義内容を少しでも理解して興味を抱いて欲しいと考える者が多いのが一般的だと思われる。ここに高校側が期待する思惑（学習意欲の喚起など）との違いがあるのだとすれば、派遣教員と高校教員が、それぞれの考え方を確認する十分な打ち合わせを出前講義前に実施することが、高校側が期待する効果を上げるための重要な条件となるだろう。

また、大学・短大への進学希望有無や受講前の講義内容に対する関心度合いによる違いも確認された。つまり、大学・短大といった高等教育機関への進学を希望し、関心のある内容の講義を受講することができたときに、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に大きな効果がみられるのである。実際の現場では、幅広い学問分野の講師を集めるために複数の大学から講師を招き、事前に生徒の希望分野を把握して、受講者を割り振るのが一般的である。しかし、受講者数の制限やすべての学問分野を揃えられないという現実的な制約などから、生徒すべての希望に応えることは難しい。さらに、高校生が持つ学問に対するイメージもステレオタイプのものが多く、特定の分野へ人気が集まる傾向がある。高校によっては、生徒の希望する分野でなくても、様々な学問分野に触れることが新たな発見につながるのだから必ずしも生徒の希望する分野と一致しなくてもよいと考えるところもあるようだが、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」を最大限に行うのだとすれば、上記のような条件を満たすことが必要であると考えられる。

### 出前講義に対する満足度は、どのように高められるのか

出前講義に対する満足度は、「派遣教員個人の力量」「講義内容に対する興味・関心の喚起」「大学に対する新鮮な発見や驚き」「講義内容に対する理解度」の4要因による影響を大きく受けている。特に、「派遣教員個人の力量」は満足度に対して大きな影響力を持っている。つまり、高校の立場に立てば、単に大学から講師を呼び、生徒に模擬講義を受講させさえすれば、彼らの満足度を高めることができるのではなく、派遣されてきた講師の力量によるところが大きいことを示している。また、「講義内容に対する興味・関心の喚起」の持つ影響力も大きい。同変数と「派遣教員個人の力量」には中程度の相関が確認され ( $r = .57$ )、両要因の相乗効果も考えられる。

ここで注目したいのは、「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に対して大きな影響力をもつ「大学に対する新鮮な発見や驚き」が、「出前講義に対する満足度」には、「派遣教員個人の力量」や「講義内容に対する興味・関心の喚起」ほどの影響力を持たないということである。「大学進学に向けた学習意欲の喚起」と「出前講義に対する満足度」には一定の相関関係がみられるため ( $r = .54$ )、まったく無関係であるわけではない。しかし、「出前講義に対する満足度」を高めることが、必ずしも「大学進学に向けた学習意欲の喚起」に直結するわけではないことが明らかになった。つまり、出前講義の効果を検証する際に、受講生徒が満足しているからといって、学習意欲の喚起等には必ずしも繋がっていないことを意識する必要があるといえる。

### 出前講義の広報的な効果はあるのか

高大連携活動の一環として実施されることが多い出前講義であるが、大学の立場としては、学生確保に向けて自大学の魅力を伝えたいという思惑がある。しかしながら、出前講義によって「実施大学に対する親近感」が特別に高まるという傾向はみられない。ただし、受講前における実施大学に対する興味・関心の程度（「受講前に、S大学へ関心はありましたか？」に対する5件法）と「実施大学に対する親近感」には、一定の相関関係が確認されるため ( $r = .52$   $**p < .001$ )、受講前から実施大学に関心のある生徒に対して、より魅力的な情報や刺激を与えることで親近感を強化できる可能性が示された。もちろん、中程度の相関関係ということは、出前講義によって「実施大学に対する親近感」が低下した生徒も部分的に存在することを示している。したがって、誰でもよいから大学から講師を派遣し、生徒に接触して出前講義を実施しさえすれば広報的な効果が得られるという考え方は見直す必要があるだろう。少なくとも

「出前講義に対する満足度」に大きな影響を与える要因は、「派遣教員個人の力量」や「講義内容に対する興味・関心の喚起」であった。こうした講義を実施できる教員が担当することが広報的な視点からみれば重要なのである。

また、各高校における出前講義の実施スタイルは多様である。筆者が所属する部署は、全学の出前講義を管轄しており、様々な高校の実施報告が集まる。それを見ると、高校によって、1つの大学から複数の講師を依頼するケースと多数の大学から様々な分野の講師を集めるケースがあり、多様な学問分野の講師を集めることができる後者のケースの方が多く印象を受ける。そのため、受講する生徒たちは自分が参加する講義が、どの大学の教員によるものなのかを、それほど意識せずに受講していることが考えられる。大学側の立場として、出前講義を広報活動の一環として位置づけているならば、こうした実施上の背景も踏まえた戦略が必要であろう。しかし、出前講義の本来の目的を高大連携活動の一環と捉えるならば、大学として何に軸を置いた出前講義を実施すべきなのか、その在り方を再確認しなければならない。

#### 普通科高校のキャリア教育における高大連携活動の位置づけ

本研究では、普通科高校のキャリア教育の一環として利用されている高大連携活動に注目し、その代表的な活動である出前講義の効果について検討した。

「高等学校キャリア教育の手引き」(文部科学省,2011)の第2章第5節では、高大連携活動の狙いと効果として、「高校生が大学の授業の一端を知ることや、大学生活の様子を聞くことで、大学生活を思い描き、高等学校と大学の関連を知るとともに進学への意欲を高める」「大学の授業レベルを知り、大学での学びと現在の学習とのつながりを認識し、学習意欲の向上を図る」「大学の施設や雰囲気を知ることにより、進路選択の一助とする」といった項目が挙げられている。本研究の結果からは、これらの項目に関するものは、出前講義によって部分的に達成できているとみることができる。しかしながら、出前講義を中心とした高大連携活動は次なる展開を検討していく必要があると考える。

まず、出前講義やオープンキャンパスなどの参加者アンケートの結果からは、「学習意欲が増した」といった一定の効果がみられるが、これらのイベント型の活動は、「単発的」という側面があるため、ここで生じる学習意欲の喚起は、一時的な効果とみることができる。さらに、出前講義などは、高校生にとって、最も刺激的でわかりやすい部分にフォーカスした内容になりがちである。しかしながら、一般的な研究活動は、先行研究の調査に始まり、資料収集、地道な実験やデータ整理等が大半を占め、刺激的な場面に出会えることは稀であろう。

確かに、「大学に対する新鮮な発見や驚き」を意識した講義内容は、高校生にとって魅力的な機会であることは間違いないが、地味な活動もあることを併せて伝えることが大学入学後のミスマッチを抑制するためには必要な点である。こうした課題点を踏まえたとき、高大連携活動の在り方は、イベント的な「単発型」から「継続型」（例えば、高校3年間を通じて実施する任意の目的を定めたプログラムなど）に向けた取り組みの転換が求められる（例えば、竜田・林・米田,2015）。今でも、SSH（Super Science High School）のような特定の高校を対象とした継続型の取り組みは実施されているが、その恩恵にあずかる生徒は、当該高校の生徒たちに限られる。もちろん、SSH 指定校は、同校の取り組みを他の高校にも発信していく活動が求められているため、様々な活動が実施されているが、まだその効果は限定的であるといえよう。

大学進学を目指す生徒が多い進学校では、大学入試に向けた学習活動が中心であり、「進路指導＝大学入試」という構図が一般的であった。しかし、近い将来、大学入試の在り方は大きく変わろうとしている。2014年12月に答申された「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」（中教審答申,2014）では、抜本的な大学入試の改革を実行する方策の1つとして、高校生の活動実績や活動履歴などを評価するための多面的な評価尺度の必要性が示されている。仮に、上記で示したような継続型の高大連携活動に参加し、一定の質が保証されていると考えられるプログラムの活動実績（例えば、修了証など）が、今後の大学入試において多面的な評価尺度の1つとして利用されるようになれば、高大連携活動の在り方が変わるとともに、高大連携活動そのものも活性化する可能性がある。大学進学希望者が多い普通科高校にとって、大学との連携はキャリア教育を考えていく上で欠かせない。高大接続改革という大きな動きの中で、高大連携活動をどのように位置づけるのかを議論することは、普通科高校のキャリア教育にとって不可欠な視点になるのではないだろうか。

### 付記

本研究は、平成23年度～26年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：若手研究B）の助成を受けて、研究成果がまとめられた。

## 参考文献

- 荒川（田中）葉（2001）,「高校の個性化・多様化政策と生徒の進路意識の変容 - 新たな選抜・配分メカニズムの誕生-」,『教育社会学研究』,68,167-185.
- 荒牧草平（2002）,「現代高校生の学習意欲と進路希望の形成 -出身階層と価値志向の効果に注目して-」,『教育社会学研究』,71,5-23.
- 中央教育審議会（1999）,「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」,文部科学省.
- 中央教育審議会（2008）,「学士課程教育の構築に向けて（答申）」,文部科学省
- 中央教育審議会（2014）,「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育, 大学教育, 入学者選抜者の一体改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ, 未来に花咲かせるために～（答申）」.
- 古市裕一（1993）,「大学生の大学進学動機と価値意識」,『進路指導研究』,14,1-7.
- 楠見孝・栗山直子・齊藤貴浩・上市秀雄（2008）,「進路意思決定における認知・感情過程-高校から大学への追調査に基づく検討-」,『キャリア教育研究』,26,3-17.
- 前田忠彦・仙崎武・柳井晴夫（1991）,「高等学校の進学指導における指導理念・方針と実践活動の関連」,『進路指導研究』,12,36-45.
- 松村英男・古川雅文・内藤勇次（1994）,「高等学校進学指導に対する関係者の態度に関する研究」,『進路指導研究』,15,37-44.
- 三川俊樹（1985）,「大学進学決定に関する研究」,『進路指導研究』,6,14-19.
- 文部科学省（2006）,「高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議報告書」.
- 文部科学省（2011）,「高等学校キャリア教育の手引き」.
- 中井浩一（2001）,「大学入試の戦後史 受験地獄から全入時代へ」,中公新書ラクレ.
- リクルートマーケティングパートナーズ（2013）,[http://www.recruit-mp.co.jp/news/library/pdf/20130129\\_01.pdf](http://www.recruit-mp.co.jp/news/library/pdf/20130129_01.pdf)
- 竜田徹・林裕子・米田重和（2015）,「教員養成課程専門科目における高校生の参画 -佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」の取組を手がかりとして-」,『佐賀大学文化教育学部研究論文集』,19,2,107-126.
- 下山晴彦（1983）,「高校生的人格発達状況との関連性についての一研究」,『教育心理学研究』,31,157-162.
- 八谷芳樹（1982）,「高校生の進路成熟における態度の側面とパーソナリティとの関連性について」,『進路指導研究』,3,27-39.